



## 神戸大学附属図書館報

神戸大学附属図書館

---

(Issue Date)

1994-10-01

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

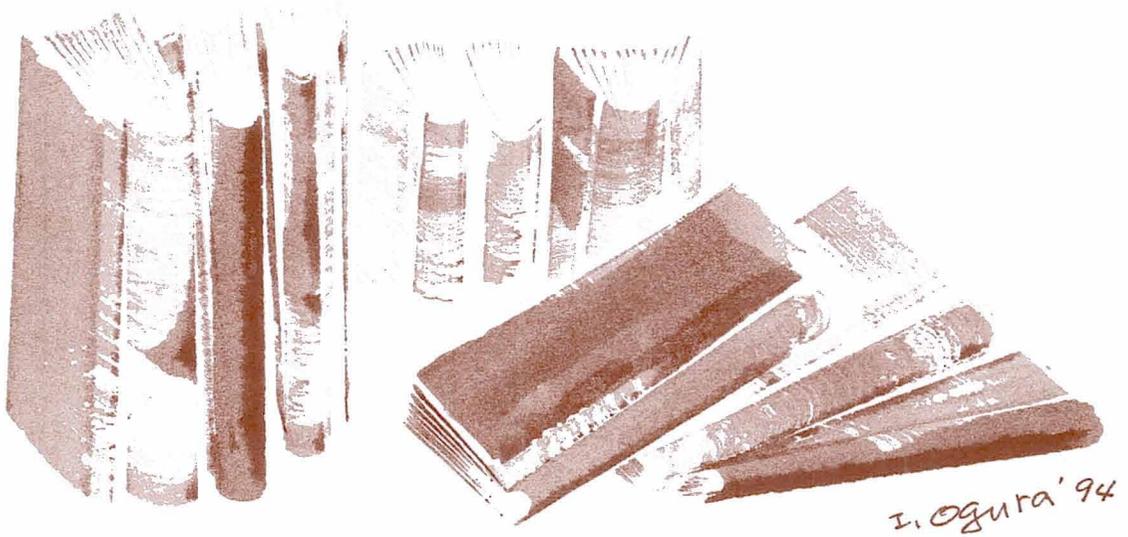
(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100475555>



# 神戸大学附属図書館報

The Kobe University Library Bulletin Vol. 4 No. 3



*I. Ogura '94*

秋季号

October 1994

## 目次

- ◆ 新中央図書館建設計画によせて(副館長・人文・社会科学系図書館担当 新庄浩二) …… 2
- ◆ 神戸大学所蔵の郷土資料-其の伍- (寺脇弘光) …………… 3
- ◆ KHANと図書館サービス- PART 1 - …………… 4
- ◆ BOOKS 自著を語る (国際文化学部 安井三吉/文学部 鈴木利章  
法学部 阿部泰隆/発達科学部 朴木佳緒留) …………… 6
- ◆ 図書館の都合 (湖内夏夫) …………… 8



## 新中央図書館建設計画によせて

新 庄 浩 二

神戸大学附属図書館は現在6つの図書館(室)より構成されている。なぜ、このように多数の図書館に分れているのかと言うと、地理的にかなり離れた所に学部があったり、またキャンパス自身が傾斜地に位置しているため部局間の往来が容易でないという事情があるからである。そのため、職員スタッフや物的施設が各図書館に分散配置される結果となり、利用者へのサービスが低下するという問題をかかえている。しかし、これは見方を変えれば、一定の予算制約の下で不利な地理的条件に対応してキメ細かなサービスを提供しようと努力している姿であるとも言える。

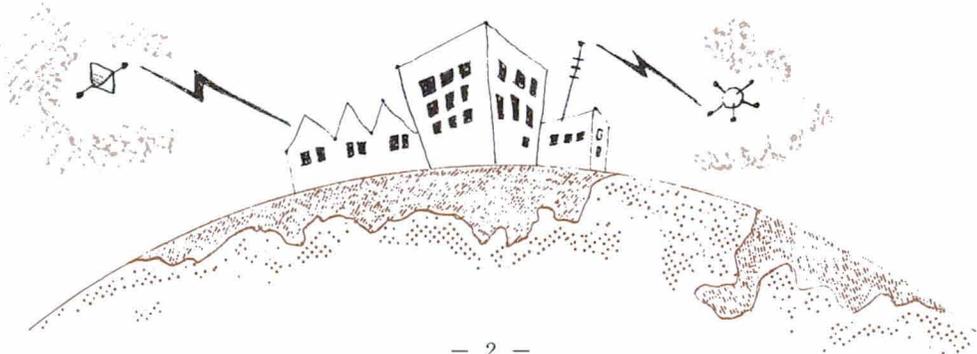
私自身は六甲台キャンパスにある人文・社会科学系図書館をもっぱら利用してきた身であり、他の図書館の実情は全く知らない。この六甲台分館という名で我々にはなじみの深い図書館は、神戸大学の前身である神戸商業大学が約60年前に当キャンパスへ移転してきた時に建てられたもので、古き良き時代を感じさせる味のある建物である。歴史が古いだけあって蔵書数も百万冊を超え社会科学系の図書館としては全国でも有数の規模を誇っている。以前に比べると、1階に開架室、2階に外国雑誌センターが設けられ冷房が入るようになったり、端末による文献検索システムが導入されるなど、各所に進歩・改善の跡が見受けられる。しかし、建物自身が商大時代

の学生数(600人)を想定して造られたものであるだけに、その何倍にも達する現在の学生数に対しては甚だ手狭な感は免れない。特に、最近ではカリキュラム改訂や新しい独立大学院設置の関係で六甲台キャンパスの学生数が増え、図書館に限らず食堂やロビーなど学生向けの施設整備の遅れが目立っている。

ところで、神戸大学では21世紀を展望した新しい中央図書館の建設構想が数年前から検討中であり、近く最終的な建設計画が決定される予定となっている。中央図書館といえば、大学のいわば顔であり、衆知を集めて関係者全員の納得の得られるような立派なものができることを期待したい。図書館は教育・研究のための中枢機関であり、あくまで利用者本位のものでなければならない。神戸大学のような地理的条件にある場合、中央図書館がどこに建てられるにせよ、そこに過度に機能を集中してしまうことには無理があると思われる。既存の附属図書館との役割分担をどうするかなど神戸大学特有の事情を十分に考慮に入れた中央図書館計画の作成が望まれる。

検討のために残された時間的余裕は余りないが、広く各層に意見を求めて、合意の形成を図り全員了解の下で新中央図書館建設計画が実現の運びとなるよう私自身を含め関係者の努力が要請される所である。

(しんじょう こうじ 副館長・人文・社会科学系図書館担当)





# 神戸大学所蔵の郷土資料 其の伍



寺脇弘光

## 近世に成立した郷土資料（2）\*

有馬温泉関係の地誌や紀行文につづいて、木版印刷による郷土資料が出版されたのは、やはり摂津地方に関するもので、摂津の全域（旧摂津国）およびそのうちの兵庫津近辺を対象にした地誌である。いずれも重要な郷土資料なので、次にその要点を紹介しておくことにする。

「摂陽群談」（全17巻17冊）岡田倭志著 元禄14年—1701刊〔注〕大坂から兵庫津や有馬温泉などにかけての旧摂津国全域（現大阪府域も含む）の地誌で、山川・港津・田・陵・城・神社・寺院・産物などの項目を設けて、各項目ごとに摂津国内各地の様子を詳しく記述している。出版元は和泉屋伊右衛門など大坂の書肆（本屋）で、このあとも、享和20年—1735版など何種類かの刊本が出版された。

「摂津名所図会」（全9巻12冊）秋里籬島著 竹原春朝斎等画 寛政8～10年—1796～98刊〔注〕「摂津名所図絵」とも書く。大坂およびその周辺地域から須磨や有馬温泉に至る旧摂津国内各地の地誌を、名所旧跡を主にして当時の各郡別に挿絵入りで詳しく紹介している。現兵庫県南東部の摂津地方が記載されているのは第6巻以降である。なお、出版

元は京都の小川太左衛門・大坂の柳原喜兵衛等4軒の書肆である。

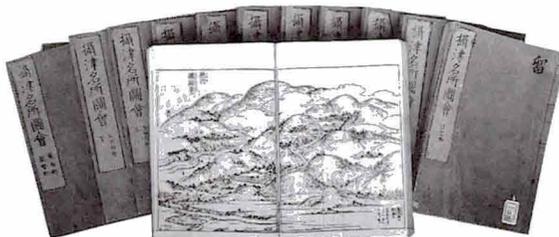
「兵庫名所記」（2巻1冊）植田下省子編 宝永7年—1710刊〔注〕兵庫津（現神戸市兵庫区）を中心に、東は西宮、西は須磨辺りまでの地誌を、名所旧跡を主に紹介した小冊子である。出版元は兵庫津磯之町の菊屋新右衛門で、大坂・京都でなく地元で印刷出版された点にも注意する必要がある。

以上いずれも江戸時代の木版印刷本であるが、印刷部数が少なかったことや、書体が漢字は崩し字、仮名は変体仮名ということもあって、明治末期以降、活字印刷による翻刻版が出版されることになる。（翻刻版については、近代の郷土資料の項でも触れる予定である）

神戸大学が所蔵する近世成立の郷土資料のうち、摂津関係の主要資料は以上の通りであるが、これは書籍形態の資料についてのことで、書籍以外の文書・記録など、いわゆる歴史史料にも重要な資料がある。

その一例が人文・社会科学系図書館が所蔵する「住田文庫」に含まれている史料類であるが、紙数が尽きたので、次回で「住田文庫」の概要とその中の近世関係郷土資料を紹介してみたいと思っている。

\*前号の「郷土文献（1）」は「郷土資料（1）」に訂正いたします。



「摂津名所図会」・「兵庫名所記」（人文・社会科学系図書館所蔵）

# KHANと図書館サービス

## — PART 1 —

平成5年度の補正予算によって、本学の新学内ネットワークが完成し、KHAN（Kobe Hyper Academic Network）と名付けられました。KHANは6月から8月までの試験運用期間を経て、9月から正式稼働の運びとなりました。本号から数回にわたって、KHANを利用して計画している図書館サービスについて紹介して行きたいと思います。

\* \* \* \*

### (1) KHANについて

本学では、以前から学内LANが稼働していましたが、全ての部局から利用できる状況ではありませんでした。今回KHANの誕生によって、全ての部局に基幹LANと支線LANから成るネットワークがゆきわたり、どこからでも容易にネットワークへ接続できる条件が整いました。

学内の隅々にまで、情報流通のための基盤を提供する。それがKHANの理念の一つですが、附属図書館でも人文・社会科学系図書館と自然科学系図書館に支線LANと情報コンセントが設置され、他の4館室では各学部 to 敷設された支線LANが利用できるようになっていきます。

KHANには、他にもATMの導入などさまざまな特色があります。詳細はKHANに関する参考文献をご覧ください。参考文献は本学のMosaicサーバー（[www.kobe-u.ac.jp](http://www.kobe-u.ac.jp)）を通じて公開されていますので、インターネットで見ることができます。

### (2) 図書館サービスの計画

さて、このように全学的な情報流通の基盤が整備された後は、いかなる情報を提供して行くのが次の課題となります。図書館では、以下の3つのカテゴリーに分けてサービスのあり方を考えています。

#### ① CD-ROMなど既存のデータベースのネットワークによる提供

この「館報」でも何度か紹介してきましたが、6館室ともCD-ROM検索用PCを設置し、サービスを行っています。しかし、単体での利用なので、特に利用頻度の高いものについては、十分に要求に応えられない状態でした。幸いKHANの完成と軌を一にして、CD-ROMサーバーを導入することができましたので、ネットワークによる提供を始めていきたいと考えています。

#### ② OPACをはじめとするオリジナルなデータベースの提供

情報発信という観点からは、既存のデータベースの提供だけでは不十分でしょう。図書館では、平成4年度から蔵書の遡及入力事業を開始し、既に38万冊を超える図書情報が蓄積されています。

このデータベースを KHAN を使って提供するための検索システムの開発を行っています。また、今年度から学術情報センターが各大学と協力して目次速報データベース作成事業を開始します。神戸大学で発行された紀要類の目次データを図書館で入力し、学術情報センターへ送ってデータベース化を行うものですが、ここで発生するデータの提供も行いたいと思っています。

更に、図書館利用案内などの広報資料もネットワーク経由で利用できるようにする予定です。(↓)

フォーマットを持つ CD-ROM にも柔軟に対応できて、しかも高速な処理が可能となるようにという目的があったからです。

また、大容量の磁気ディスクを備えているので、検索ソフトを必ずしもクライアント側に置く必要がなく、サーバー側で一括管理することができます。磁気ディスクに蓄積したデータは、CD-ROM と同様にネットワークを通じて利用できるので、様々な情報提供サービスの可能性が開けます。



### ③ ネットワークそのものの活用

人文・社会科学系図書館と自然科学系図書館には情報コンセントが設置されました。図書館からネットワークが利用できる！そんな環境にしたいと思っています。

それから、図書館に設置されている目録検索用の端末が不足気味で、試験期には列を作る姿も見られます。この機会に何とか端末不足を解消したいものです。

### (3) CD-ROM サーバーについて

本号では、CD-ROM サーバーについて少し紹介します。今回導入されたのは、21 台の CD-ROM ドライブと 1.4GB の磁気ディスクを備えたサーバーと 7 台の CD-ROM ドライブを備えたサーバーの計 2 台です。

このような構成を採るのは、異なる

ネットワーク OS としては、世界的に標準となっている NetWare を使用しており、学内のどこからでも KHAN を経由して利用できることとなります。

サービス内容については、まず需要の多い MEDLINE からサービスを開始することにし、差し当たりは各図書館に設置した端末で検索できるようにします。これによってすべての館室で MEDLINE が利用できるようになり、ネットワークでの利用が順調に進めば、次の段階として、研究室からの利用を開始したいと考えています。研究室から検索できるようにすれば、図書館が閉館している時間帯でも利用が可能です。

これ以外の CD-ROM サービスについても追って「館報」でお知らせして行きます。

(情報システム掛)

## 『盧溝橋事件』

安井三吉著 (研文出版 1993. 9)

北京の南西およそ15キロほどのところに、盧溝橋があります。1937(昭和12)年7月初め、この橋の付近で、日中の武力衝突が起こり、やがて戦火は華北へ、さらには上海へと拡大し、ついに日中の全面戦争へといたりました。全面戦争の契機となったこの衝突は、その橋の名にちなんで盧溝橋事件(中国では、七七事変)と呼ばれてきましたが、1931年9月の柳条湖事件(中国では、九一八事変)の場合とちがって、その経過については、今日なおわからない点が少なくありません。くわえて、中国人は、日中戦争を語る時、「三尺の氷は、一日の寒さで張るものではない(冰凍三尺、

非一日之寒)」などと言いますが、侵略、非侵略の問題にかかわるシビアなテーマだけに、この事件についてもさまざまな見解があり、日本と中国の間、日本人研究者相互の間でも、論争が続いています。

本書においてわたしは、日中双方の関係文書、当事者の回想録を可能なかぎり集め、そのうえに盧溝橋事件を再構成してみようと思いました。まずは今なにが言えて、なにがまだわからないのかを明確にすることに心がけたつもりです。来る1995年は、第二次世界大戦終結から50周年にあたります。東アジアにおいて、なぜ、あのような戦争へと突入していったのかを考える一助にでもしていただければさいわいです。

(やすい さんきち 国際文化学部教授)



BOOKS BOOKS

— 自著を語る —



## 『中世の裏社会—その虚像と実像—』

A. マッコール著/鈴木利章・尾崎秀夫訳  
(人文書院 1993. 9)

ここ一世代前までは、歴史学は歴史学にふさわしいテーマがあった。つまり天下国家にかかわる問題がそれにあたり、その支配の対象となる大半の国民などは、その埒外におかれた。とくに社会の底辺にうごめく人びとなど、“むだ細胞”(坪井九馬三『史学研究法』三十頁)と断罪され、まったく歴史学の目のとどかぬかなたに置かれた。しかし世界大戦後フランス発信の新しい歴史学の波の高まりにより、天下国家の重要性は認めつつも、それとのかかわり合いも含めて、社会の底辺にも十分に光をあて、歴史を全体として把握す

べしとの考え方が強くなり、最近書店の店頭で、この種の本を多く手に取ることができるようになった。社会を支えてきた人びとに目が向けられるのは、喜ぶべきことといえよう。本訳書は、この流れに棹さした力作であり、西欧の中世に限定されたものとはいえ、社会の底辺や暗部を紹介した著作である。ロビン・フッドやヴィヨンなどの著名な悪党も出演するアウト・ローや犯罪者の群、かれらの処刑の仕方や刑罰の実態、乞食や売春婦、最近話題の同性愛者、異端、魔女、ユダヤ人などを具体的な史料を引用しつつ活写し、それらの存在をアピールしており、図版も多数掲載され退屈しないようになっている。

(すずき としあき 文学部教授)

## 『政策法務からの提言

—やわらか頭の法戦略—

阿部泰隆著 (日本評論社 1993.11)

世の中、狂っていませんか。矛盾や無駄、不公平はありすぎませんか。定型的に所得のない学生が豊かな老人世帯を支援する国民年金の強制加入、蠅を追うごとき、駐車違反車両のレッカー移動、捨て得の放置自動車対策、税金のクロヨン、消費税の益税、ドラ息子の外車まで経費とする税法、国家からただで貰ったタクシーなどの免許が売れる規制システム、臭い水を飲ます水道、行き場のない障害者や病気の老人、玉の輿(逆玉の輿)に乗らなければ入手できない一戸建て、無駄金を使い、効果があがらない公共事業などはその例でしょう。



## 『性役割をのりこえて

—和田典子先生のあゆみと家庭科の歴史—

朴木佳緒留著 (ドメス出版 1993.11)

本書は、すぐれた教育実践家である一人の高校家庭科教師の足跡を軸にして、戦前の家事・裁縫教育そして戦後の家庭科教育の歴史を述べたものである。

家庭科は家事と裁縫を教える教科で、伝統的な性役割を担うものとイメージする人はなお多い。今日では中学、高校とも男女共学必修となっているにもかかわらずである。私は、それは無理からぬことと思っている。戦前の家事科、裁縫科、戦後の家庭科を通算するとおよそ百年もの間、これらの教科は女子用教育を行ってきたためである。

戦後に記された女子教育史の多くも、これらの教科について、伝統的な性役割推進教科

これは法律の仕組みの欠陥です。本当なら、法律を作るには、関連する法システムとの整合性、憲法適合性の確保、実効性のある法の執行の確保、法を運用し、あるいは法の対象となる人間の行動原理と心理などを考慮し、公平で、合理的で、効率的で、憲法上の人権を尊重するシステムを工夫しなければならないのですが、従来、そうした視点が欠けていた欠陥立法が少なくないのです。本書はこれを切開して、治療法を試みたものであります。

これが実現すれば、庶民の税金はむしろ値下げしても、国民にはより公平で幸せな生活を提供できます。

なお、これは日本の行政の法システムを整理した体系書(阿部泰隆・行政の法システム[有斐閣])を具体の例に応用したものです。あわせて参照していただければ幸いです。

(あべ やすたか 法学部教授)



— 自著を語る —



とみなしてきた。しかし、その時代、その場にいた人の目を通して歴史をとらえ直すと、また別の側面が見えてくる。女子に特有の教育を強制した社会にあっては、女子はそれを逆手にとって上級学校進学の道を開くことができたし、矛盾のなかに身をおいていたからこそ見えるものもあった。

本書について、「自分は家庭科を『白い眼』で見てきたが、このような複雑な背景と奮闘の歴史をもっていたとは知らなかった」という感想を述べて下さった読者があった。時代と社会の規定のなかで、性役割を引き受けざるを得なかった多くの女性を等身大でとらえると、何が見えてくるのか、本書を書き終えた後もなお課題に思うことである。

(ほうのき かおる 発達科学部助教授)

## 図書館の都合

湖内夏夫

大抵の図書館では、NDC（日本十進分類法）を使用しています。中には独自の分類を行っているところもありますが、大分類から順に階層構造となっていて、目的の分野の図書は、大体の見当をつけて探していけば見つかるはずになっています。ところが、この4月から明石高専に転出して、やはりNDCによる図書の配架を見て、全国どこへいっても図書館で働ける！と安堵したのも束の間でした。確かに分類はNDCを使用しているのに、目的の本が見つけれないのです。

理由は、図書館の迎ってきた歴史的背景と、制約されたスペースにより、特殊な配架となっていることです。4月当初は、なんでこんなところにこんな本が、と不満たらたらでした。じゃあどうする、と考え始めたら、いろんなところに不都合が出て来て、ついに閲覧室はおろか書庫まで含めて全部の図書を動かさざるを得ない、という結論に達してしまいました。

個人的には建築関係と美術の本が嫌いです。図書館に勤めながら本の好き嫌いを言っはいけないかもしれませんが、サイズがまちまちで、大きな本が多く、配架するのに困ってしまいます。大抵の場合、明石高専でもそうですが、大型本のコーナーを設けて別置してあります。この別置が、困ったことにそんなに大きなスペースを用意していることがまずありません。しかも、何年も経つうちに別置を忘れて本来の分類の棚に入っていたりします。

別置といえは、文庫や新書の大きなかたまりも別置です。この場合の別置に2通りあります。一つはシリーズとして分類上もひとかたまりにしてしまう方法。本来の分類の棚には代本板で表示します。しかし、これで目的の本を探すのは容易ではありません。もう一つの方法は1冊1冊に分類を与え、配架します。これで大きなかたまりから目的の分野を探すのは容易になりました。ところが、目録から特定の図書を探す場合、本来の分類の棚にあるはずがなく、これは別置になっているんだ、と気がつく必要があります。

と、ここまで考えるのに3ヶ月かかりました。毎日朝から晩まで図書館にいる者にしてこれですから、必要なとき以外に訪れることのない利用者、特に学生の方は卒業までに図書館の蔵書のうち、いったい何割に接していることでしょうか。弁解になりますが、図書館にはそれぞれ長い歴史と扱いにくいスペースのおかげで、本来あるべき場所にない本が沢山あります。これをいかにして活用してもらうかは、「利用案内に書いてあるから読めばいい」のではなく、別置は図書館側の都合で行っているのですから、絶えず機会あるごとに利用者への広報が必要です。また、利用者の皆さんも、暇があったら図書館へ来て、隅から隅まで棚を見て、新たな発見をしてほしいと思っています。

（こないなつお 元人文・社会科学系図書館職員）

**【編集後記】** さて、暑い夏の次は？ 勿論「読書の秋」です！ ということで今回はこのコーナーをページ増にしてお届けしています。虫の楽をバックに様々な分野での先生方との出会いをどうぞお楽しみ下さい。（M.K.）

神戸大学附属図書館報 Vol.4 No.3 （通巻第14号）1994（平成6）年10月1日発行

編集・発行 神戸大学附属図書館 神戸市灘区六甲台町2-1（〒657） 電話(078)881-1212（大代表）